

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

☆ 『福祉のひろば』アンケートにご協力ください! ☆

『福祉のひろば』は、2025年で月刊化25周年をむかえます。この機会に、総合社会福祉研究所会員および『福祉のひろば』読者のみなさんを対象に、本誌をどのように活用されているかをお聞きし、今後の発展に活かしたく、アンケートにとりくみます。下記QRコードよりご回答をお願いします。

『福祉のひろば』のいいと思うところ、改善してほしいと思うところ、また、情報発信や会員・読者の交流のあり方について、ぜひみなさんのアイデアをお寄せください☆ご協力をよろしく申し上げます!

総合社会福祉研究所 / 月刊誌『福祉のひろば』

TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895

<http://www.sosyaken.jp/>

E-mail: mail@sosyaken.jp

※その他、メール等でもぜひご意見をお寄せください。

個人会員・
読者はこちらから↓



団体会員は
こちらから↓



早朝から夜間まで、 異年齢保育の実践を積み重ねて



かわらまち夜間保育園は、1989年に朝7時から深夜1時までの認可保育園としてスタートしました。長時間の保育園生活の中で、同じクラス内でも登園時間帯の幅があることで生活リズムや気持ちのズレが生じてしまうという課題が見えてくるなか、子ども自らが決めていく姿が生活づくりの軸になっていけるよう、乳児を含む異年齢で過ごす保育が提案されました。週一回、異年齢クラスで過ごすという10年間の試行期間を経て、2011年に「かわらまち保育園」が「かわらまち夜間保育園」の併設園となる際、クラスを登園時間ごとに分け、1～5歳児の異年齢3クラスに編成しました。



上の写真は、「ゆうがおぐみ」のお楽しみデーでおこなった手巻き寿司パーティーです。朝から深夜におよぶ長時間保育のため、子どもたちの登園時間はバラバラです。日祝日が仕事で平日休みの家庭もあります。どうしてもクラス子ども同士でかかわる時間が少なくなりがちなので、クラスでたっぷり遊んで同じ時間を共有すること、そして生活リズムのたてなおしも考え、月に1、2回はクラスみんなで集まる「ゆうがおデー」をつくり、子どもたちのやってみたいことを実現できるようにしています。



夕ご飯は毎日、子どもたちがお米を洗って炊いています。「カレーライスだから8合は入れないとね」などやりとりをしながらお米を洗います。大きい子たちのやるのうすを見てきた1歳の子たちも、異年齢の暮らしに慣れてくると「お米やりたい」とご飯炊きに参加しはじめます。自分でごはんやおかずもよそい、たわいもない話をしながらわいわいと過ごしている夕食タイムです。



夕食を食べ、お風呂に入り、保護者のお迎えまでは保育園で就寝し、順次降園します。夜の時間をパズルや物づくりなど、静かにあそぶ子もいれば、部屋いっぱいにお化け屋敷をつくってお化け屋敷ごっこをしたり、おにごっこ、コマ、なわとびなど、みんなでやりたいことを考えながら遊び、にぎやかな夜になることもあります。長い時間保育園で過ごす子どもたちが、一日を楽しい気持ちで就寝に向かっていけるよう、子どもの24時間を保護者とともに考えながらつくっています。

(写真・文 かわらまち夜間保育園主任 みだかまゆこ 三高真由子)

【ひろばトーク】

「当事者ではない私」を生きること 吉田 千亜 6

●特集● 福祉の世界にとびこんで
～他業種から入職した職員、集合！～

1、転職したきっかけや、入職しておどろいたことは?! 12

2、福祉のしごとのたいへんさや魅力は?! 22

今本健太／黒田和馬／宮田久輝／苅谷陽平／大迫純子

〈福祉のしごとにくみみなさんへ〉

「生きる」を感謝できるしごと 橋本 亮 32

福祉のしごとは魅力がいっぱい！～寄り添うことの大切さ～

小林新一郎 34

「権利としての福祉」を保障するためにあなたの力が必要です！

二見 清一 36

●トピックス●

養護老人ホーム・ケアハウスでの「暮らし」と「住まい」を支える 朴 仁淑 38

家族や職員が語る事実から社会福祉を考える

——調査をおこなった学生さんたちからの報告 黄 驥 42

●連載●

★新連載★ 阪神・淡路大震災発生から30年 第1回

長かった一日（前編） 吉見 賢治 48

なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場

不安ではなく希望の道を切り開くために 西原 弘明 52

続・ヘルパー歳時記 「あなたに任せておけば、大丈夫」① 56

WORK WORK——わくワク—— すみだ花工房 60

利用者と職員が一緒になってフィナンシェづくりに挑戦

JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合（49） 62

福祉保育労25春闘アンケート結果

私の履歴書 社会福祉経営全国会議（49）

子どもの育ちに魅せられて 笹田トヨ子 64

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（69） 水野阿修羅 66

育つ風景 子どものほんとうの気持ちを探し当てる 清水 玲子 68

映画案内 『パリタクシー』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

大阪の繁華街などで続く野宿者排除 生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

いろんな場所で展示会じゃ！ ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

福祉のひろば

2025年4月号

●表紙の絵●
神門やす子



みんなのポスト 46／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● 早朝から夜間まで、異年齢保育の実践を積み重ねて

「当事者ではない私」 を生きること

フリーライター 吉田千亜

私が原発事故にかかわるようになったのは、三〇年前の阪神淡路大震災が一つのきっかけかもしれません。「災害」のもたらす理不尽さを目の当たりにし、自分に何かできないだろうか、当時高校生だった私は考えていました。突き動かされるように向かった神戸市東灘区でのわずか二週間足らずのボランティアでしたが、帰るときに抱えていたのは、「当事者ではない私」でした。

神戸市に滞在中、私は地域のことを話し合う会議に書記の役目を割り当てられ、参加しました。被災した地元の男性が、場を仕切っていたボランティアに向かって「お前たちはどうせ帰る。帰る場所のあるやつは、帰れ！」と叫んだのです。阪神・淡路大震災から一か月ちよつとの頃。被災した方々は心身ともに限界だった頃です。その男性も苦しみつづけていたのだと思います。

私は、顔を上げることができず、そのやり場のない憤りいきどおと憎しみを全身に浴びていました。若かった私は「何かできる」と思っていたのだと思います。いま思えば、それは恥ずかしい思い上がりでした。

とある避難所に物資を届けたときのこととも思い出されます。母親世代の女性に「娘の卒業式があるけれど、着ていく服がないから行くか迷っている」と相談されました。その問いに「私だったら来てほしいと思う」と伝えたのを覚えています。当時の私の精いっぱいいっぴやの返事でした。

今の私なら、そう答えないのではないかと思います。娘さんはどうおっしゃっているんですか、と言うかもしれませんし、あなたはどうしたいと思っておられますか、と聞



よしだ ちあ

1977年生まれ。フリーライター。主に東京電力福島原発事故の取材を続けている。『孤塁 双葉郡消防士たちの3・11』（岩波書店）で講談社本田晴春ノンフィクション賞（第42回）、日隅一雄・情報流通促進賞2020大賞、日本ジャーナリスト会議（JCJ）賞受賞。『ルポ母子避難 消されゆく原発事故被害者』（岩波新書）、『その後の福島 原発事故後を生きる人々』（人文書院）、近著に『原発事故、ひとりひとりの記憶——3・11から今に続くこと』（岩波ジュニア新書）。

くかもしれない。本来は、誰かの心を「私」が侵^{おか}してはならないはず。とはいえず、「私だったら」を完全に排除することはできません。その狭さを補完するために、私以外の人の経験や思いを、できるだけいいねいに聞く作業が必要だと、今はそう思います。でも、当時の私は何も知らずに「私だったら」と無邪気に答えていました。

二〇一一年三月一日、私は原発事故にかかわることを決めました。最初は、自分の子どもや次世代のことが心配で、少しでもマシな社会にしないで、と思いました。その後、地元の埼玉県で避難者さんの交流会を開き、避難者さん宛てのニュースレターの発行にかかわるようになりました。阪神・淡路大震災で、「当事者ではない私」に悩み、ボランティアに行ったときり逃げてしまった自分に、「本当に私は原発事故にかかわれるのか、覚悟はあるのか」と自分に問うたことを覚えています。

原発事故から一四年。毎年のように「節目などない」と思います。被害を受けたあとと人生は続いていて、これからも続きます。

ともすると、「原発事故の取材」は事故の日のことから聞きはじめます。かつての私もそうでした。でもある時から、できる限り「生まれてからのこと」から聞くようにしています。もちろん、すべてを知ることにはできませんが、せめて少しでも、大切にしていたものやその人の人生を知りたいからです。そして、その先に続くはずだった未来のこと。

でも、それでも足りないのです。知ることなど、できない。そう思い続けることが「当事者ではない私」を生きることで、今は考えています。

人生経験ゆたかな職員の存在に期待して

『福祉のひろば』四月号の特集では例年、春から福祉の仕事に就く予定の学生さんたちに集まっていたとき、福祉の仕事をめざした理由や、仕事をはじめににあたっての希望や不安などを語っていたたく座談会などをおこなってきました。現在も福祉関係の学部や養成校を卒業し、「新卒」として福祉の仕事に就く方もたくさんおられますし、法人や事業所側も、そうした学校や学生さんへのアプローチ、リクルート活動にさまざまな工夫を凝らしています。

いっぽうで福祉現場には、ほかの仕事を経て、転職して福祉の仕事に就き、力を発揮されている方もたくさんおられます。そこで今回は、転職で福祉の仕事に就いた五人の職員さんにお集まりいただき、ほかの仕事や職場を経験しているからこそ見えるちがいや、福祉の仕事の魅力を語っていただきました。

社会福祉の学部や養成校で福祉についての学びを深め、資格を取ったり実習を経て入職してくれる職員がいることももちろん大切ですが、同時に、別の角度で福祉の仕事を見ることができたり、人生経験ゆたかな職員がもたらしてくれる職場へのポジティブな影響もあります。以下は、五人の職員さんの上司からいただいたコメントです。ほかの仕事を経験して福祉の仕事に就いたみなさんに期待することについて、ひとことずついただきました！ 特集の記事と合わせてご覧ください。

（編集主任 申 佳弥）

..... ◆ ◆

からだに関する専門的な知識をもち仕事をされていた今本さんだからこそその発想で、子どもの遊びの幅がひろがったり、それがまたほかの保育士にとっても良い刺激になると思っています。体が資本の私たち保育士に対して、体の使い方やストレッチのレクチャーをお願いしたこともあります。今本さんの経験も

存在も、園のなかで活着ていると思っています。

(子すすめ保育園)

保育園で働く職員は保育士や栄養士などと限られますが、保育園を利用する親は、本当にありとあらゆる職種の方がおられます。だから、職員自身がいろいろな経験を積んでいることそのものが、保育園ではたらくうえでとてもたいせつな専門性につながっていくと思っています。いろいろな経験を経ていまの黒田さんがあるので、その人間性を存分に出してほしいと願っています。

(かわらまち保育園)

福祉に興味をもつきっかけはさまざまだと思います。高校や大学での学びや、「ご自身の生い立ちから、自分の仕事として選択された方もいますが、他職種で経験を積んで福祉に興味をもたれた方が最近増えています。今ある福祉の現状を見極めて、今まで培ってきた経験の視点も大事に、意見を発信して活躍してくれることを期待しています。

(高鷲学園)

みぬま福祉会では、転職で入職した人が長く働きつづけてくれています。「どうして?」と聞くと、「まかせてもらえているから」「自分の仕事がだれかにつながっていると思えるから」が、二大回答でした。なかま(利用者)たちの生活はバラエティにあふれているほづがいいので、いろいろな経験をもち、それを大切にしている人がそばにいてくれるのは心強いです。たぶん、福祉の仕事だけをしてきた私にとって、も心強い存在なんだろっと思えます。

(白岡太陽の家に)

なかまとの距離感、ころあいのみはからい方……。大迫さんはその空間をふわっとやわらかくすることができると奇特な人です。自らの経験やそこで得た実感から手に入れた力なのだろうなあと思っています。あらゆるものの嫌なところではなくいいところを見ようとする人です。これからも変わらず、あらゆるものをちよごぐよくしてもらいたい、と思っています。

(第一もみじ作業所)